大　学　雑　感

大阪大学工学部原子力工学科
三　宅　千　枝

最近とかく「大学」についての問題が新聞や週間紙をにぎわしているようである．このように書くといかにも他人事のようであり，大学に勤めている人間としてけしからぬ発言であるとお叱りを受けるかも知れない．しかし，正直に云ってこのような問題のとり上げ方に今一つピンとこないものがあるというのは，やはり私の社会的関心の稀薄さによるものであろうか．私自身戦後大学の門が開放され，女子でも入れるということだけで何となく大学の門をくぐってしまったのである．当時は女子学生といってもほんのまばらで，更に教少ない先輩の下宿に招かれてはいろいろお話を伺ったりしたものである．10年余のうちに女子学生が過半数を占めるに至る学部まで現われるようになったのは誠に喜ばしいことであると思う．しかしその反面，女子学生亡国論を引きおこし，ひいては大学の理念がマスコミニケーションの場に取り上げられる一因となった点はやはり私も考えて見たいと思う．

大学で受けた教育の成果とその社会的還元ということが大きな問題点とされている．順序が逆になるが，まず女子学生に対するきびしい評価の因となっている社会的還元という点についてみる．大学卒女性の就職状況の表面的な数字の結果から直ちに，職業意識の低いことや，職業と家事の両立などいろいろの点について現状の解析が論じられているが，この社会的還元を云々するやり方が，いかにも現代社会のものの見方の特徴を示している．今世紀特に第二次世界大戦によって自然科学は飛躍的な進歩を見せいわゆる物質文明はすばらしい発展を遂げた．確かに物質面における人々の生活は豊かにはなったけれど，今日のわれわれの精神の状態は，すでに精神文明の喪失にも気付かぬほどに，物質文明の見かけのきらびやかさに蝕まれているように思われる．物質文時と精神文明とは車の両輪をなすもので，若し片側の車輪のみが回転すればその車は脱線顚覆の危機に直面する人工頭脳は人間が行えば何億年もかかる計算を1日でやってのけることは出来る．しかし人工頭脳を考え出し，人工頭脳に計算を行わせるのは人間であって，人工頭脳それ自身は何も考え出しはしない．この明白な事実を見失わない常識さえもが，失われているように思われる．およそ教育の成果というものは一朝一夕にして現われるものであろうはずはない．大学教育を受けた女性の社会的還元性を直ちに表面的な数字から云々するのはあまりにも近視眼的であり，即目的的で教育の本質を見失ったものではなかろうか．またもし大学教育の社会的還元性をかかる数の上から論ずるとすれば，その質の面からも取り上げてみなければならないと思う．最近新聞紙上から拾ったものであるが，カラーテレビの生産がぐんぐん伸び，つくれば売れると云う．白黒テレビの出現から早くもカラーテレビが大衆のものとなりつつあると云うのは誠に結構な話であるが，カラーテレビメーカーの営業部門は販売の糸口を，カラーテレビを所有することがその家庭の一種の社会的地位を示すものであるという発想に見いだそうとしているという．私は大学卒の男性のあの顔この顔を次々と思い浮べてみるのだが，もし一個人として話合ったらそれぞれに教養ある紳士ばかりなのである．ところがただ一筋に利潤を追求する経済機構の歯車に一歩足を踏み入れるや否やこのような暴力的言動をも敢えて辞さない集団となり果てるのである．もちろんこのような販売方針をメーカーが打出すには，相手方の一般家庭の主とし主婦層の知的水準に相応したものなのであろうが，しかしただもう自己の利潤のみを求めて他をかえりみない商業主義にがんじがらめになっている男性のどんなに多いことであろう．まだある．製薬会社のコマーシャルにみられる無責任な薬品の宣伝も大いに気にかかるものの一つである．副作用が直ちに陽性に現われるものは論外であるが，たとえばビタミン剤など過剰服用すれば人体に自然にそなわったビタミン製造器官は次第に廃用性萎縮を来すであろう．成人ならばいざ知らず，幼い子供達の発育途上にあってまさに自然に対する冒瀆と云わねばなるまい．何も製薬会社に限ったことではない．資本主義経済の機構の中にあってわれわれは日夜精神的にも肉

体的に，ただ一筋の商業主義から押寄せる荒波の中に立尽さねばならないのである．家庭の主婦こそ，このような社会にあって一家の健全な精神と肉体とを守り育てて行く任務を持つものであり，更に社会全体の動向を正しく導くものである．教養ある常に問題意識を持つ女性こそ，物質文明の暴走する社会にあって精神文明の担い手であり，かつ精神文明の担い手であり得るものであるのであって，その教育に対する還元は遠く人類社会への還元をなすものなのである．したがって女性の高等教育に対する社会的還元は，一朝一夕に論じられるべきではなく世代を経る次元において論じられるべきであって，女性亡国論等に至っては男性の近視眼的な即自己的目的な思考態度を如実に現わしたものと云えるのではなかろうか．

大学の教育あるいは大学制度さらには大学の理念が大きくとり上げられているが来るべき時期が来たというよりむしろ遅すぎた感がある．しかし何も周章ることはない．国の将来がそれによって方向づけられ決められていく教育の問題である．広く内外の事情と人類の歴史の流とを洞察した識者らによって根本を誤ることなく考えられたいものである．そしてこうした問題はいささかでも時の為政者らに譲るところがあってはならないだろう．そして識者らがまことの識者であるならば，〝大学〟問題は少くとも男性女性の別を設けて論じられるべき問題ではないということは末梢の愚言となるであろう．

先に告白したように私自身はただ何となく大学に入り現在に至ったのであるが，どうも今の社会においては，はっきりした目的意識もなく行動することは小学生や幼稚園の園児にも許されないようである．学生達は一体どのような目的を持って大学に入学しょうとするのだろうか．何という愚問かと笑われるかも知れない．しかし大変素朴なこの疑問に対し私は未だ明瞭な答えが得られないのである．親の熱意により，また友人の誰もかもが大学にいくからか．そして大学を出ておかないと，よい職業につき，よい配偶者を得，快適な文化生活を営み得ないからだろうか．いや若い人々にはもっと清潔な夢もあるだろう．真理を探求する最高の学府において自ら高邁な学問の道にたずさわらんがために入学を目ざすものも少くないだろう．このように色々の目的意識があるであろうが，ここでその何れがより高度であるかどうかを論じようとは思わない．大学もまた人間社会の一つの産物である限り，誰しもこれを利用し何ものかを得ようと考えることは甚だ当然のことと思われる．しかし世の親たちの中には，先年の経済成長がもたらした株式ブームと同じような気持で，子供の大学進学を最も確実な成長株と信じている人々がなくはなかろうか．なる程戦前では大学も少くその卒業者は稀少価値さえ有していたし，その将来はまず保証されていたようである．そのような社会にあって大学に学ぶことができず栄達の道をとざされていた人々が，果されなかった夢を子供に託そうとする気持ちはおそらく私の想像以上のものであるのだろう．しかし大学の教育は魔術ではない．大学に入ったからといってまるで夢のように真理が知得され，高度の知識と技術とが体得されるわけではない．四年間の大学教育が大学生を一様に智者にし君子にするわけではない．私は時として，生まれてから二十年間の生活体験の結晶を学生の言動の中にまのあたりに見ることがある．そしてまた他方僅か半年か一年の研究室生活の中に，彼の内にもたらされた全人間的な成長の目ざましさに目をみはることもあるのである．こんなとき私自身の任務に対する認識を新にし，鞭打たれる．無論，大学の教育は教養を身につけることだけを意味しているのではなく，専門的な知識や技術を修得する場でもある．しかしこの場合でも大学という名のもつ魔力に幻惑されてはなるまい．大学で得た専門的な知識や技術が，そのまま会社等の職場で直ちに役立つものであると考えられるだろうか．実際には大学卒の人々が入社したためにすぐに会社の業績が飛躍的に伸びるとでも考えている経営者が一人でもいるであろうか．おそらくこのような点が学歴無用論にもつながるとこを持つものであろう．大学の専門教育は云うまでもなく，大学を出て後にそれぞれの職業の専門家となり得るような基礎を与えるものであって，それぞれの職業の専門家それ自体をつくるものではない．何故このような明白な事実を取り上げねばならないのか．高度の専門的知識をもち社会に有用な人材を養成するということが，ただ一つの用語の置き換えで混乱しているからである．社会という語は単に官庁や企業体と等価ではない．と云って私は何も産学協同というような社会の連帯関係をとやかく云おうとしているのでは毛頭ない．しかし本来，大学は人間と研究成果の売買によって維持されるべき企業であってはならないのである．むしろ今日の大学の使命は，学術研究の進歩に不断の努力を傾注するのみでなく，その成果が正しく人間社会の文明の進歩のために使われるよう責任を持つべき立場にあるのではなかろうか．

私自身卒業十年余をすでに大学において過してきた．その間家庭や育児との両立は大きな問題ではあるが，女性であるが故に研究上の不便を感じ男性として生れて来ていたならと感じたことはなかったと云える．むしろ女性であるが故に，男性よりも遥かに伸び伸びと研究を楽しむことも出来，また大学のもつ雰囲気や大学のあり方を素直に肌で感じることが出来るように思われる．

（以下33Pに続く）

（28頁より続く）

科学技術の今日のすばらしい進歩を身近に感じながら，私はふと逆説的に思う．有能な男性諸氏が会社においてあるいは研究所や大学において生存競争に打ち勝つため日夜汗して研究に従事している．そしてその成果は社会的に還元されて家庭の女性を肉体労働から開放するために役立つことも随分と多いであろう．経済的にも時間的にも余裕を得た女性は，家庭から社会へとその目を向け始めることだろう．そうした時，男性はどのようにして女性を家庭にとゞめておくことが出来るだろうか．そのような日の早く訪れるのが待たれるのである．